



企業編

株式会社コイシ 3D開発 国東営業所

安岐町中園100番地 開設：平成26年7月 従業員：13名



創業者 小原文男
さんは、様々な職種を経験する中で、現場監督の仕事が大変な仕事であり、それを少しでも助けてほしいという思いで、個人商店として、どんな仕事も請ける形でスタートしました。

当初は施工管理・工事測量を主業務としており、その後、高速道路や新日鉄構内現場などで着工前測量・施工測量・三次元計測などの業務を行い、事業を拡大していきました。また、測量作業の簡素化を図るため長年かけて開発した土木用計算機「丁張マン」は、平成9年の販売から現在も全国で売れ続けています。平成23年には福岡県と佐賀県の県境に、大手ゼネコンなどが建設していた五ヶ山ダム

の関わり方を探るための研究施設としての役割を担っています。今後は、航空レーザーを使って調査した国東半島の測量データと測量技術を活かして、地元の発展に貢献したい。そして、雇用を生み出し地域振興にも貢献していきたいと考えています。

負受注しました。それからは、県外の大規模工事の測量業務が入るようになり、飛躍的に業績を伸ばしていききました。そのような中、今後の土木のあるべき姿を考えているとき、偉人三浦梅園の「自然の力を活かし、人の知恵を入れて、心豊かなものを創造しよう」という考えに惹かれ、平成26年7月に3D開発国東営業所を三浦梅園の故郷安岐町に開設しました。



第一次産業編

里めぐみファーム 九設ふるめ 国東支店

国東町安国寺

開設：平成27年4月 従業員：20名



株式会社九設ふるめは、九州北部を中心に自治体の上下水道施設を維持管理するキューセツAQUA株式会社で農業に企業参入するため、平成24年8月に佐賀県鳥栖市で設立されました。現在もミニトマトの栽培を30アール規模のハウスで行っています。

今日までの約5年間で培った最先端のオランダ式ミニトマト栽培ノウハウと販売運営手法を持って、いよいよこの度、この大分国東市において、当初計画通りの営農規模拡大が実現したところで、めぐみファーム国東支店では、品質が良く、多

取量が見込めるオランダ新種に着目し、企業型の農業を実施します。平成29年3月に完成したこのハウスは、鳥栖農場での経験を活かしたハイワイヤー方式で、培地をハウスの内張りから吊り下げるなど、光合成を最大限に生かすことで高品質のミニトマト生産が可能となります。また作業の効率性も格段にアップします。平成29年4月には初回分の定植作業を行いました。栽培当初、地元で募集した必要人員が集まらず、人員の入れ替わりも激しかったため、人材育成には苦慮しましたが、その中で付いて来たメンバーは順調に技術を習得し、新しく入ってきたメンバーを指導できるまでに成長しました。これにより合計3万本のミニトマトを定植作業が無事完了しました。そして、月10トンの収穫を確保し、初年度目標の出荷量134トン達成の見込みです。



今後は、積極的に販路を拡大していくため、県内のデパートやスーパーマーケットの取り引きをさらに増やし、海外への輸出も計画していきます。また、隣接地にキューセツAQUAがオリーブを植樹しており、いずれはミニトマトとオリーブを連携した事業展開ができればと考えています。

商工会編

まさごや 染物店

国東町鶴川

昭和3年から染物屋を営む



左から娘の沼田貴世さん、馬場義彦さん

まさごや染物店は、現代代表の馬場義彦さんの祖父故兵太郎さんが昭和3年に創業しました。昭和24年に兵太郎さん亡くなり一度は途絶えましたが、兵太郎さんの知人 太田旗店の初代会長の故太田修三さんが、高校3年生だった義彦さんを「まさごや」を復活させるために自分のところで修業しないかと誘ってくれました。高校卒業後、太田旗店で修業に励み、徐々に染物の奥深い魅力に引き込まれていきました。そのような中、昭和47年に母が体調を崩し、同居するために帰郷して「まさごや」を昭和48年2月に復活させる

ことにしました。当初は、小さな小屋で染物をしていましたが、太田旗店から仕事を請け負うことができたので、妻の千津留さんと一緒に5年後には工場を立てることができました。その後、染物技術を磨き続け、地元でも仕事が入るようになり、安定した経営を営むことができるようになりました。義彦さんの働く姿を小さい頃から見ていた娘の貴世さんは、自然と後を継ぐことを夢みるようになりました。高校と大学は染物をするためにデザイン科で学び、卒業した平成9年から、一緒に働いています。ちょうどその頃から、染料が樹脂染料に代って鮮やかな色で染められるようになり、今まで学んできたデザイン力を活かしたノボリなどが、口コミで広がり、県外からも仕事が入るようになりました。貴世さんは、「父のように職に字を手書きできる職人は県内には数人しかいません。市内の神社やお寺を巡ると父が書いた職も数多く掲げられています。そんな職を見ると、みなさんの願いを叶えるために手助けできているようで幸せな気持ちになります。そんな大好きな父の字を、しっかりと受け継ぎ、国東半島に残していきたいと考えています」と語っていました。